ニュースレター

Hokkaido University
Institute for the Advancement of Higher Education

北海道大学 高等教育推進機構
Newsletter　No. 95

全学教育科目における学生の自習時間　(5 ページ)
ルーブリックを使ってみよう　(7 ページ)
小学生対象のかけっこ教室開催　(19 ページ)
サイエンス・カフェ札幌開催　(20 ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言 FOREWORD

新渡戸カレッジと４学期制

高等教育推進機構長・理事・副学長　新田 孝彦

この４月から高等教育推進機構長を務めております。「世界水準の教育システムの確立」という今期の中期目標の実現に向けて努力してまいりますので，ご協力のほどよろしくお願いいたします。

新渡戸カレッジ

さて，教育に関する本年度の最大のトピックは，何と言っても「新渡戸カレッジ」が開校したことでしょう（写真 1)。本堂前理事・副学長を中心としたタスクフォースが練り上げたプランが文部科学省のグローバル人材育成推進事業に採択され，品位ある自律的な個を確立し，国際社会の中で日本人としての自覚をもって活躍する人材の育成を目指した特別教育プログラムが開始されたのです。この「新渡戸カレッジ」は, 全国的にもユニークなものですが, 本学にとっても，選抜された学生群に対して特別のプログラムを提供するという初めての企画であり，来年度から留学生を受け入れる予定の「現代日本学プログラム課程」とともに，バイリンガルキャンパス構想の重要な柱となります。

このプログラムは，通常の学士課程の卒業要件に 15 単位を付加するものであり，しかも海外留学が義務づけられているために，当初は関係者の間でもどれだけの応募があるか相当心配したのですが，これは杞憂でした。初年次の募集枠 120 名（1 学年の定員は 200 名ですが，80 名は 2 年次に募集します）に対して，400 名ほどが応募し，本学の学生の志の高さを見事に示してくれました。

写真１　新渡戸カレッジ開校式のようす

アカデミック・カレンダー

このように，少なくとも本学の学生の多くは，世に言われるほど内向き志向ではなく，機会さえあれば，世界に飛び出すフロンティア精神を十分に備えていると言えるでしょう。後は，大学と教員がこの学生たちの期待にしっかりと応えることができるかということになります。たとえば，留学先となる大学の開拓や留学情報の提供，留学資金の援助なども必要になります。

ところで，グローバル人材の育成が叫ばれる中で，海外との交流の拡大を妨げていると言われているのが日本の「アカデミック・カレンダー」（学事歴）です。マスコミでは，東京大学が打ち上げた「秋季入学」や，それに伴う「ギャップターム」問題がよく取り上げられますが（東京大学でもこれらを早期に導入することは見送ったようですが），現在，多くの大学がグローバル化への対応の鍵になるものとして取り組んでいるのが，このアカデミック・カレンダーの問題です。

従来の２学期制（セメスター制）では，海外に留学するためには，少なくとも半年間は自大学の授業をとることができず，留学先の大学と単位互換協定などを結んでいたとしても，多くの場合は留年を覚悟しなければなりません。就職活動の時期の問題などで，留学を躊躇する学生も少なくないと思われます。また，短期の受け入れや派遣に関しても，２学期制は障害となっています。本学では数年前から，海外の大学における夏期講座等を受講しやすくするために，６時間授業を導入し，できるだけ早く夏期休暇に入るようにしていますが，これによって早めることができるのはせいぜい１～２週間であり，抜本的な解決策にはなっていません。そもそも，梅雨から夏にかけてきわめて高温多湿な気候風土であるにもかかわらず（本学は例外ですが），２学期制のもとでは夏休みに入るのはどうしても７月下旬か８月上旬になってしまいます。

そこで，「４学期制」（クォーター制）というアイデアが浮上してきます。一般的には，これまで半期（試験期間を含めて16週間）で行っていた２単位の授業を，週に２回実施することによって８週間で終わらせるというやり方です。国内の主要大学では，少しずつこの制度を学士課程に取り入れる大学が出てきました。本学では，理系の大学院では４学期制をとっているところが少なくありませんが，学士課程に関しては，ごく一部の学科において実施されているだけです。

ただし，大学によっては，すべての授業を８週間で終えるのではなく，半期あるいは通年で開講するものと併用しているところもあります。科目の性格によって，たとえば，大量の資料を読み込むことが前提の授業では，週２回の授業は難しいかもしれません。そのような場合は，16週で２単位という授業もあってよいでしょう。あるいは，すべての授業を１単位化するということも考えられます。積み上げ式の授業では不可能だと考えられるかもしれませんが，その場合は，今年度から全学教育などで導入した，授業科目のナンバリングが有効に働きます。ある学年だけを４学期制にするということもあり得るでしょう。要は工夫次第ということです。

４学期制は，学生にとってメリットがあるだけではありません。４学期のうち１学期は授業を行わないことにすれば，教員にとっても，これまで以上に海外での研究や教育がやりやすくなります。多くの教員が全学教育から大学院教育までを担っている本学においては，すべての課程において４学期制をとるのが望ましいと思います。

グローバル人材の育成を推進し，新渡戸カレッジを成功させるためには，学生に充分な留学機会を保障する必要があり，またそのためには，アカデミック・カレンダーをできるだけ国際標準に近づけ，国際的な流動性を確保しなければなりません。今後，教育改革室において４学期制について精力的に検討を進めていきますが，新渡戸カレッジ生のみならず，他の多くの学生の留学への志に応えるためにも，

それぞれの学部が少なくとも学生の流動性に配慮した時間割を組むことが強く求められています。

もちろん，学期の問題は手段であり，教育内容と方法の改善が伴わなければなりません。

第４回「シラバスコンクール」推薦科目を公表

北大では平成 12 年度から各授業科目のシラバスをホームページに公表するとともに，教育ワークショップなどで授業設計の方法，シラバスの書き方についての内容改善をはかってきました。

平成 21 年度からは，シラバスの改善に役立ててていただくため，高等教育推進機構全学教育部，高等教育開発研究部門等の協力のもと「シラバスコンクール」を始め，今回は平成 24 年度の全学教育科目，学部専門科目，大学院科目のシラバスの中から参考となる 20 科目を選んで公表しました。

http://educate.academic.hokudai.ac.jp/syllabus/syllabus2012/top.pdf

シラバスは，開講部局，課程，授業科目の性質により，きわめて多様であるため，一律に「模範例」を挙げることは困難です。そのため，本コンクールでは，各科目・各学部・各大学院から複数推薦された中から，参考となるシラバスを選んでいます。なお，過年度に同一の授業科目・教員にて選ばれたものは除外していますので，過年度の推薦科目もご参照ください。

シラバス作成の留意事項を表 1 に示しましたので，作成の際にはご留意ください。特に，⑤は外部評価等でも指摘されており，「出席点○％」などの記述は不適切とされています。

良いシラバスとはどのようなものか，今回公表されたものを参考例として，今後も部局，課程，授業科目等ごとに，FD や関係教員グループの討論で議論を深め，学生の役に立つシラバスを作ることが求められています。皆様ご協力のほどよろしくお願いいたします。

（竹山 幸作）

表１　シラバス作成の留意事項

①	必須項目（授業の目標，到達目標，授業計画，準備学習（予習・復習）等の内容と分量，成績評価の基準と方法）はもれなく，できるだけ具体的に記述してください。
②	「授業の目標」（一般目標）と「到達目標」（行動目標）を明確に区別し，それぞれ（教員ではなく）学生の視点から記述してください。「授業の目標」（一般目標）では，授業で扱う内容の概略を，たとえば「○○について理解する」などの形式で，できるだけ具体的に記述します。「到達目標」（行動目標）では，この授業で学生がどのような能力を身につけることが期待されているかを，たとえば「○○について説明することができる」などの形式で，具体的に記述します。
③	「到達目標」（行動目標）と「成績評価の基準と方法」は密接に関連づける必要があります。到達目標は必ず成績評価の対象としなければなりません。
④	「授業計画」と「準備学習（予習・復習）等の内容と分量」については，2 単位の授業科目では，定期試験の期間を除いて，最低でも 30 時間（15 回）の授業時間の確保が必要とされ，また，教室内外の学習を合わせて，標準的に 90 時間の学習が必要とされていることを念頭において，両項目を密接に関連づけ，できるだけ具体的に記述してください。
⑤	「成績評価の基準」においては，単純に出席を点数化して加算することは厳格な成績評価を実現するうえで問題があるとされています。学生が能動的に参加する授業計画を立て，授業への積極的な参加を評価するといった授業設計が必要です。
⑥	部局独自の様式のシラバスでも，「授業の目標」（一般目標）と「到達目標」（行動目標）の区別をし，「授業計画」と「準備学習（予習・復習）等の内容と分量」を関連づけて記述してください。

IR INSTITUTIONAL RESEARCH

「学生調査 2012 年報告書」から見える 北海道大学の学生像（1）

高等教育機関において，「IR（Institutional Research）」というキーワードが広まりつつあります。IR を日本語で表現すれば，「機関調査・研究」であり，高等教育機関の教育・研究，学生支援，経営等の改善や改革に生かすことを目的に，学内の様々なデータ（学生・研究・財務）を収集，蓄積，分析する調査・研究活動です。本学では，平成 24 年 9 月に文部科学省大学間連携共同教育推進事業「教学評価体制（IR ネットワーク）学士教育課程の質保証」が，8 大学の連携事業として採択され，1 年生と 3 年生の学生を対象に連携大学共通のアンケートを実施しています。

このアンケートの調査結果は IR 活動の基本となるものであり，他大学との相互比較により，本学の特長や短所が数値として明らかになります。調査項目は，「大学での全般的な学習状況」，「英語学習」，「大学生活や教育環境に対する評価，意識」の 3 つの領域に焦点を合わせています。2012 年の調査結果につきましては，「学生調査 2012 年報告書」としてまとめ，公表したことを前号でお知らせしましたが，今号以降，本学の特徴に注目して，その内容の一部を紹介していきたいと思います。今回は，学生の時間の使い方について紹介します。

図 1 は，学生の居住形態を示しています。本学の学生の半数以上がひとり暮らしをしていることがわかりますが，連携大学を含めた全体では，7 割近くが自宅学生です。居住形態は通学時間に影響を与えます。図 2 の通り，本学の学生の約 7 割は，通学時間が 30 分未満になっています。一方，全大学では，約半数の学生が 1 時間以上と回答しています。これほどの通学時間の差は，1 日の生活に多少なりとも影響を与えると考えられます。

図 3 は，「授業時間以外に，授業課題や準備学習，復習をする」という問いに対する回答です。一年生，上級生ともに，本学の 1 ～ 2 時間の割合（一年生 11%，上級生 15%，以下同様）は全大学（25%，27%）の約 2 分 1 になっています。一方，本学の 6 ～ 10 時間の割合（31%，25%）は，全大学（16%，14%）の約 2 倍になっています。また，図 4 に示す「授業時間以外に，授業に関連のない勉強をする」という問いに対しては，一年生では，本学と全大学で大きな差がありません。本学に注目すると，「全然ない」と回答した学生の割合は，一年生が 26% に対して，上級生が 11% と大きく減り，「3 時間以上」と回答する割合が大きく増えています。全大学では，上級生において「全然ない」と回答する割合は，22% と一年生（31%）に比べて多少減っているものの，本学の上級生（11%）の 2 倍の値を示しています。さらに，図 5 は，アルバイトの時間を示しています。本学の一年生は，半数以上が，「全

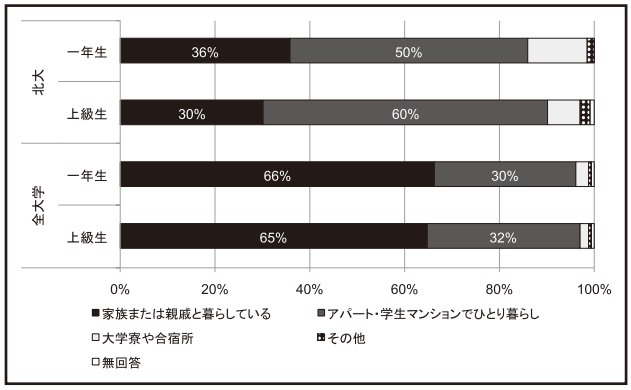


図 1　居住形態

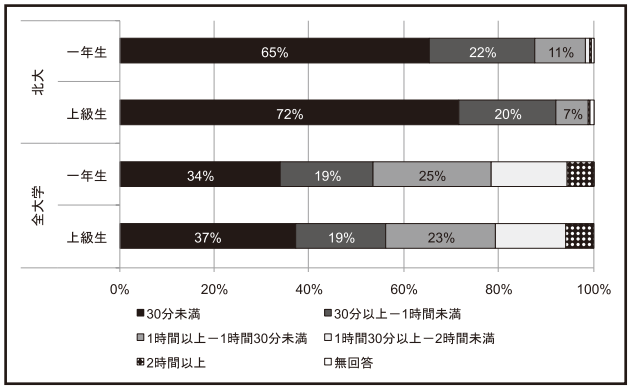


図 2　片道の通学時間

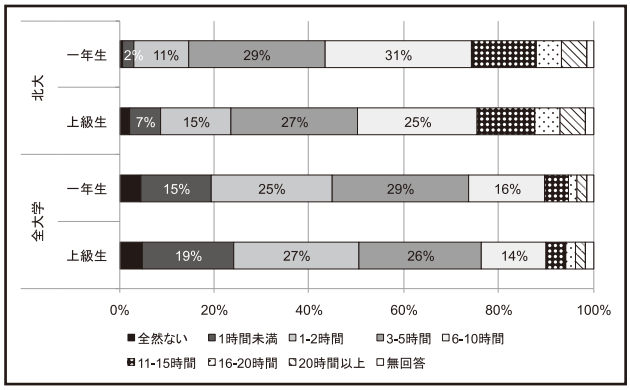


図３　週あたりに，授業時間以外に，授業課題や準備学習，復習をする時間

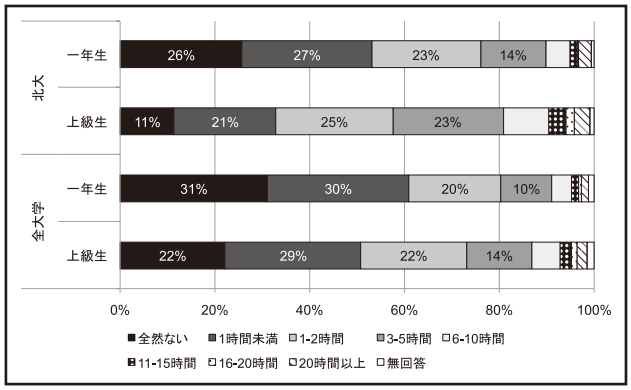


図４　週あたりに，授業時間以外に，授業に関連のない勉強をする時間

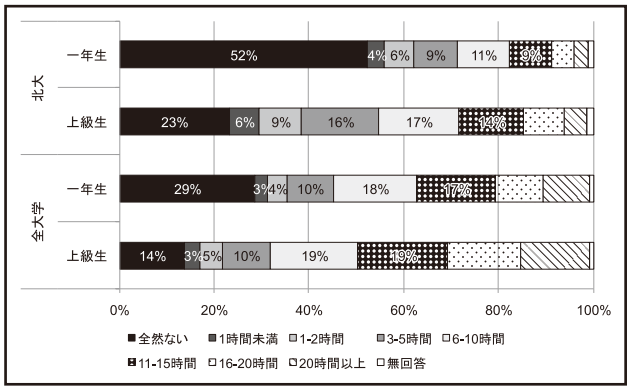


図５　週あたりに，大学外でアルバイトや仕事をする時間

然ない」と回答しています。上級生においては８割近くの学生が，何らかのアルバイトを行っていますが，費やす時間は全大学に比べて短い傾向にあります。

これらの結果をまとめると，本学の学生は，通学時間やアルバイトに費やす時間が短く，その分を学修時間に充てることができているという特長が見えてきます。また，授業に関係のあることに関する学修時間は，上級生になり減るが，その分，授業に関係のないことに関する学修時間は増えるという，全大学には見えない特徴を確認することができます。単に，授業に関係のあることに関する学修時間だけを見ていると，上級生になり学修時間は減っているという結果を得ますが，授業に関係のないことに関する学修時間を調べることによって，本学の上級生は，授業に関係なく自ら積極的に学修を行っている様子をうかがうことができました。しかし，長年の課題になっていることですが，絶対的な学修時間が短いという傾向については，引き続き問題意識を持つべき課題と考えています。

（宮本 淳，徳井 美智代）

全学教育科目における学生の自習時間
―平成 24 年度授業アンケートより―

本学では，平成 11 年度より学生による「授業アンケート」を実施しています。平成 24 年度は，授業アンケートの実施方法等を見直し，全学教育科目については高等教育推進機構で実施し，学部専門科目については各学部において，それぞれの特性を考慮した独自のアンケートを実施しました。本稿では，これらのアンケートのうち，全学教育科目における学生の自習時間について分析した結果を紹介します。

設問は「この授業１回（90 分）のために予習・復習に費やした時間は平均（　）であった。」となっており，回答は５択「A：4 時間以上，B：3 時間，C：2 時間，D：1 時間，E：30 分以下」です。自習時間の分析では，これらの回答を，「4 時間以上」＝4（単位：時間），「3 時間」＝3，「2 時間」＝2，「1 時間」＝1，「30 分以下」＝0.25 に変換し，平均自習時間を求めました。なお，基準となる自習時間は単位制度から定義されますが，大学設置基準および本学の通則に「…1 単位の授業科目を 45 時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準

とし…」と定められています。つまり，2単位の授業では90時間の学修量が必要になります。授業時間は，1回1.5時間が15回（週）で22.5時間になりますので，残りの67.5時間（授業1回あたり4.5時間）が自習時間の基準になります。

はじめに，全学教育科目全体の平均自習時間をみてみます。平成24年度の平均は，1.12時間でした。回答比率は，1時間以下が71.9％を示しており，基準となる4.5時間を大きく下回っています。図1は，全学教育科目全体の平均自習時間を学期ごとに分析した経年変化を示しています。自習時間は，平成21年2学期をピークにして，近年ごくわずかですが，減少する傾向が見られます。また，本学では，平成23年度に，総合入試を導入していますが，その影響を確認することはできず，平成22年2学期以降を概観すると，平均自習時間1.16時間程度（標準偏差は0.03時間程度）で，ほぼ一定と解釈することができると思います。

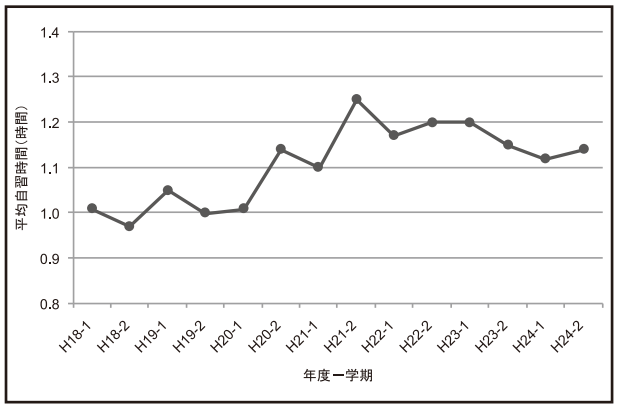


図1　全学教育科目における自習時間の経年変化

表1は，科目区分ごとの平均自習時間を示したものです。一般教育演習，共通科目，外国語科目，外国語演習，日本語科目・日本事情に関する科目（留学生が対象であり，授業数が他の科目区分に比べて非常に少ないので，以降では議論しない）の自習時間が比較的長くなっています。特に，共通科目については，学期間で大きな差がありますが，これは，1学期の必修科目になっている「情報学Ⅰ」の授業外課題に取り組む時間が長くなっている結果であることがうかがえます。また，一般教育演習の自習時間が長いのは，授業外で取り組むべき課題（実習，調査やレポート）が多く課されているためと考えられます。外国語関係の科目では，予習に割く時間が多くなったと推測されます。

以上のように，全学教育においては，学生に対して授業外で行う課題の多さと自習時間の長さに相関があるように見えます。授業の難易度に関しても，「難しい」と感じる授業ほど自習時間が長くなる傾向があります。また，授業手法や教員の行動に関する質問（「説明はわかりやすかった」，「熱意が伝わってきた」，「聞き取りやすかった」，「学生の参加を促進した」，「質問等に適切に対応した」，「各種機器を適切に使用した」）に対して高評価な回答が多い授業ほど，学生の自習時間が長くなる傾向があります。課題を多く課し，授業の難易度を上げることによって，ある程度自習時間が伸びることは，予想できることであり，学生に学修習慣をつけさせる手助けになると考えられます。ちなみに，授業アンケートでは，「授業で要求される作業量は適切であったか」と聞いていますが，平成24年度の調査では，74.2％の学生が，「強くそう思う」あるいは「そう思う」と回答しています。さらに本結果は，説明の仕方や熱意，聞き取りやすさなどにおいて学生から高評価を得るような授業を展開することによって，学生の自主的な学修を促し，自習時間が伸びる可能性を示唆しています。

（授業アンケートの詳細につきましては，本学のホームページ http://www.hokudai.ac.jp/pr/tenken/tenken/self/jugyo/ をご参照ください。）

（宮本 淳，徳井 美智代）

表1　科目区分ごとの平均自習時間（単位：時間）

	主題別科目	総合科目	一般教育演習	共通科目	外国語科目	外国語演習	基礎科目	日本語科目・日本事情に関する科目
平成24年度1学期	0.90	0.78	1.31	1.43	1.36	1.32	1.14	1.97
平成24年度2学期	0.93	0.81	1.24	1.25	1.27	1.32	1.20	1.86

「一年生・上級生調査 2011 年」の比較分析を公表しました

連携 5 大学（北海道大学，大阪府立大学，同志社大学，関西学院大学，甲南大学）の「一年生・上級生調査 2011 年」の結果を比較した『連携 5 大学「一年生・上級生調査 2011 年」の北海道大学を中心とした比較分析』を，「高等教育ジャーナル」オンライン特別号として公表しました。下記をご覧ください。

http://socyo.high.hokudai.ac.jp/Journal/J20PDF/No2010.pdf

（細川 敏幸，安藤 厚）

高等教育 HIGHER EDUCATION

高等教育フォーラム「ルーブリックを使ってみよう」開催される

3 月 27 日（水）16 時から 90 分にわたり，情報教育館 4F 共用多目的教室（1）で表記フォーラムが開催されました（写真 1）。講師は米国からお呼びした，Dannelle D. Stevens ポートランド州立大学教授で，大学におけるルーブリック（Rubric）使用の先駆者の一人で，著書も出版されています（Introduction To Rubrics: An Assessment Tool To Save Grading Time, Convey Effective Feedback and Promote Student Learning, Dannelle D. Stevens, Antonia J. Levi, 2004, Stylus Pub Llc）。なお，本書は近く邦訳が出版されるそうです。

学生の成績評価にレポートを使うことがよくありますが，その評価の公平性・透明性については議論のあるところです。その解決方法の一つが，「ルーブリック」です。ルーブリックは客観的な評価基準です。ルーブリックが適切に設定されていれば，誰が評価しても同じ成績になります。TA も評価に参加することができます。また，レポートを提出する学生にとっても，目標が明確になり書きやすくなります。本講演ではルーブリックの基本的な解説とともに，4 段階に分けた作り方，アセスメントツールとしての有効な使い方を学びました。

（細川 敏幸）

写真 1　フォーラムのようす

全学教育 TA 研修会を開催
―162 名が修了―

平成 25 年度全学教育 TA 研修会が，4 月 4 日（木）に，高等教育推進機構大講堂を主会場として開催されました。

TA 制度は，広い意味の大学院教育の一環として導入された，よき大学教員・職業人となるための実地訓練（教育現場の体験）のための制度ともみなされています。大学院学生は，教員とともに学部教育に参加することによって，自分の専門についてより一層理解を深め，教育の現場において教えることの意義を理解することもできます。この目的を達成するためには事前の研修が必要であり，北米でも PFF（Preparing Future Faculty）という名称で実施されています。本機構では，全学教育 TA 研修会を平成 10 年度から開催しており，今年度は 16 回目となります。

本研修会は，全体会（午前の部）と，分科会（午後の部）で構成されています（表 1）。

全体会では，TA としての心構えや事務処理の方法など，基本的な事項のレクチャーを行います。山口淳二先生の講演では，全学教育だけではなく，今年度開講する「新渡戸カレッジ」についても説明がなされました。教育に携わるものとして，学習者の背景を理解することは重要です。また，分科会は，14 のセクションに分かれ，セクション毎に特化した内容の研修を行います。各分科会の報告は後述します。

今年度の修了者（全体会・分科会ともに出席した者）は 162 名でした。修了率（修了者数／対象者数）は 38.4％（平成 24 年度は 40.7％）でした。修了率向上にむけ，開催日変更も踏まえ検討したいと考えております。なお，修了率の若干の低下は，遅刻の取扱を厳しくしたことが影響していると思われます。

本研修会で配布している『北海道大学全学教育ティーチング・アシスタントマニュアル』は，今年度改訂を行う予定です。ご意見等ある方は，ご連絡いただけると幸いです。　（竹山 幸作）

表 1　平成 25 年度北海道大学全学教育 TA 研修会プログラム

〈午前の部〉	司会：竹山 幸作（高等教育推進機構）
9：30	挨拶　新田 孝彦　高等教育推進機構長
9：35	講演「北海道大学の全学教育について」 山口 淳二（役員補佐，理学研究院）
10：05	講演「TA の心得」 瀬名波 栄潤（文学研究科）
10：35	休憩（10 分）
10：45	「TA 業務に関する事務処理の内容」 土本 光一（教務課）
11：00	パネル討論「TA の可能性～現状と理想」
	司会：山田 邦雅（高等教育推進機構）
	教員パネラー：近藤 浩之（文学研究科）
	鈴木　誠（高等教育推進機構）
	院生パネラー：兼古 哲也（情報科学研究科）
	和田 和幸（理学院）
12：00	昼休み
12：00 ～ 12：30	コーヒーブレーク（TA 経験者との談話）

〈午後の部〉 以下の 14 の分科会に分かれて実施
一般教育演習，一般教育演習（フィールド体験），講義，論文指導，情報学，英語Ⅱオンライン授業，英語Ⅱ以外の英語の授業，初習外国語（中国語以外），中国語，文系基礎科目，心理学実験，理系基礎科目，自然科学実験，アカデミック・サポート

分科会の報告

A，B　一般教育演習

本分科会では「チームを創るコミュニケーション」をテーマに，(1) コミュニケーションに関する概論，(2) 事例検証，(3) 総合討論，の三部構成で研修を実施しました。(1) では，コミュニケーション能力の重要性，その向上には自己理解と他者理解が不可欠であること，そのためにはエゴグラム（心の中の５つの機能の強弱を把握する）が有効であることを説明し，実際に各自のエゴグラムを作成するとともに事例を分析しました。(2) では分科会ごとに，具体的な問題事例を元に TA の対応方法とそのためのエゴグラムについて議論しました。(3) では，TA にはエゴグラムの５つの機能を状況に応じて使い分ける必要があること，学生および教員のエゴグラムを把握し，個々の心理的特徴に応じたコミュニケーションをとることが，グループをチームに変える原動力となることが共有されました。

（池田 文人，関 秀司）

C　講義

分科会 C は，大講堂に集合しマニュアルを参考資料にして，細川のミニレクチャーにより TA 制度の歴史と意味，シラバスの読み方，講義の基礎手法を学びました。次に 38 名の参加者を２クラスに分け，N282 は三上，山田が，N283 は細川，竹山が担当し，グループ学習によるケーススタディを行いました。まず，アイスブレーキングによりグループ内の自己紹介と役割分担を確認し，「雪の使い方」でグループの動きを会得しました。次に「出欠を学生証のリーダーで確認している講義を担当した。学期の終わり近くになって，５回目と７回目に出席したが学生証をかざすことを忘れたとの申し出が TA の菅君にあった。菅君はどうすべきか。」など，現状に即応した４つの起こりうるケースにどう対応すべきかを議論しました。各グループとも熱心に課題に取り組み，最後の発表でも課題を場合分けして対策を考えるなどしたわかりやすい解決策が提示され，有意義な研修となりました。　（細川 敏幸）

D　論文指導

本分科会の参加者は６名でした。二人で一組を作り，大喜利「先生，こんなひどいレポートが出ました」に取り組みました。論文指導の TA として遭遇する状況を予想する演習です。列挙された，ひどいレポートに対してどのような指導を行うべきか，参加者一同で考えました。論文指導が付加される講義は多岐に及びます。論文の内容に関する話題で共通項を見出すことは不可能に近く，分科会では形式面に重点を置くこととなりました。　（川口 暁弘）

E　情報学

本分科会では，情報学 I の目標，内容，指導体制，教材，成績評価の概略の説明と具体的な評価項目の説明を行いました。また，情報基盤センターの教育情報システムを使った授業課題の設定方法の研修を行いました。

今年度は情報倫理ビデオの新版が提供でき，情報倫理小冊子の教材も新しいものとなった旨，説明を行いました。また，パスワードを簡単なものにしていたために起こった実際の事例を紹介し，学生に被害者のみならず，加害者にもならないような指導が必要であることにも触れました。

昨年までの特徴的なトラブル事例を述べるとともに，その対応策，および公平な成績評価のあり方と，具体的な評価体系の説明を行いました。情報学では，140 もの多数のグループが統一カリキュラムで授業を進行していきます。そのような統一カリキュラムを行うことによる優位性と，公平性を担保することの重要性などの担当者の心構えにも触れました。

情報学では，初回は，全体説明の後に，即，コンピュータ教室に移動し，授業が開始します。1 つの講時で最大 10 グループが並列して授業が進行しますので，スムーズに学生を誘導する流れについて説明し，各自の当日の授業の流れをおさらいしました。授業では 50 名超の TA 等がグループ指導者として，各コマ，20 人程度の学生を担当します。TA の指導力育成にもつながる本科目での TA 経験がより良いものになるように，TA 全員が主体的に授業に関わる必要があります。全体研修会後には，各講時で授業全体を統括する，タイプ S の TA との打ち合わせも行いました。

以上，新入生 2600 人が履修する情報学 I を円滑に進めるための有意義な研修会となりましたことを報告いたします。なお，本 TA 研修会は，大学院共

通科目「情報学教育特論」の講義を兼ねています。

（布施 泉）

F　英語Ⅱオンライン授業

最初に情報教育館 CALL 教室で，業務の内容や TA としての心得を説明しました。次に，英語Ⅱ TA 経験者と初心者をペアにして, PC へのログイン，Webtube（教材サーバ）へのログイン，操作練習を行いました。その後，全学教務で出勤簿と CALL 教室の鍵のありかを確認し，E309CALL 教室の位置を確認しました。さらに，S 研究棟 CALL 教材準備室 A に行き，PHS，名札，出勤簿の確認をしました。休憩後，メディア 110CALL 教室で経験者 TA と初心者 TA をペアにして，「おしゃべりを続けている学生にどう対処するか」などいくつかの課題をグループで考えてもらい，発表，ディスカッション，質疑応答を行いました。多くの積極的な発言があり，大変有意義な研修会になりました。

（大野 公裕）

G　英語Ⅱ以外の英語の授業

「英語Ⅱ以外の英語の授業」分科会は，4 月 4 日 13 時半にメディア研究棟 407 会議室に集合し，必要に応じて構内を移動しながら行いました。終了時間は 14 時半頃，参加者は 6 名です。内容は，1）TA マニュアルを参照しながらの心構えと注意事項のミニレクチャー，2）出席者全員による自己紹介と情報交換―TA 経験談と質疑応答，3）担当授業に関する最終確認（使用教室等），4）全学教務・全学スタッフ室・教員研究室の案内，5）普通教室・CALL 教室（該当者のみ）の使い方（鍵・機器類）の説明でした。TA 担当者はとくに情報の扱いについて注意することや具体的な対応方法を強調しました。参加者からは主に学生と教員との間に立った場合の TA のコミュニケーションのあり方について質問があり，ケース・バイ・ケースでの柔軟な対応を心がけることや疑問や心配をかかえずに担当教員や TA 担当者に相談することなどのいくつかの考え方が議論から導かれました。

（青山 和佳）

H　初習外国語（中国語以外）

分科会には 1 名が参加しました。教育学部の教員による外国語演習仏語中級の担当であるので，外国語演習のカリキュラム上の位置づけ，仏語演習全体の責任者等について説明しました。具体的にどのようなサポートを教員に期待されているか確認し，アドバイスを与えました。次に外国語 TA が一般に気をつけておかなければならない注意事項を説明しました。基本的には服装に気をつけること，教室内では常に学生に見られていることを意識し，不適切なふるまいをしないこと等です。担当教員と問題が生じた場合の連絡先についての説明後，質疑応答を行い，予想される履修者数や履修者の学習動機等について答えました。

（西村 龍一）

I　中国語

TA 研修会中国語分科会は 4 月 4 日 13 時～ 13 時半，メディア・コミュニケーション棟 608 室（ビデオスタジオ）で行われました。メディア・コミュニケーション研究院教授長井裕子と同渡邉浩平が担当し，中国語 TA38 名が参加しました。分科会の内容は，まず，北海道大学の中国語全体の構成や授業内容について説明した後，中国語 TA に求められる職務，気をつけるべき点などを，長井と渡邉より説明しました。その後，アンケート用紙，名札を回収し，個別の教員との打ち合わせを行いました。

（渡邉 浩平）

J　文系基礎科目

本分科会の参加者は 5 名でした。「1. 教養教育とは何か？　文系基礎科目とは何か？」では,「…入門」という科目に対する学生側のイメージと教員側のイメージの相違を議論して,「入門」だからといって必ずしも広く浅くというわけではないことに注意するよう喚起し，シラバスをよく読むことが大切だとの認識を得ました。「2. TA になるための心構え」では，具体的な教材を示して，教える側に立ち教育・学習の効果向上をはかることを議論しました。「3. TA に期待する業務内容」および「4. グループセッション」では, 100 名程度の大教室で起こりうる, 1）黒板が見えない・話が聞こえない，2）座席が足りない，3）遅刻，4）私語，5）室温・換気，6）器材の不具合などの問題を想定して，対応策を議論しました。いずれにしても，事前の現場下見や，担当教員との打合せが非常に大切であるという認識を得ました。

（近藤 浩之）

K　心理学実験

本分科会の参加者は５名でした。ティーチング・アシスタントマニュアルを輪読しながら，TA の心構え，実験授業の補助として求められること，心理学実験における TA の役割，特に注意すべきこと，等について質疑応答を交ぜながら説明を行いました。最後に，この実験授業で TA が直面するかもしれない幾つかの問題に対して，TA がどのように対応すべきか討論を行いました。　（田山 忠行）

L　理系基礎科目

前半はミニレクチャー「グループ学習の基礎」（分科会 C〈講義〉と合同）に参加し，講義における TA の役割及びグループ学習の基礎について受講しました。後半は，北大理系１年生のメンタリティ，理系大人数講義の特徴や注意事項，理系講義における技術（黒板，プロジェクタ，レーザーポインタなどの使い方）について受講し，その後担当科目別の５グループに分かれて，これまでの経験を踏まえたうえで理系講義 TA はどうあるべきかについてグループ討論しました。様々な意見が出され，参加者は有益な問題意識を持つことができたと思います。

（野嵜 龍介）

M　自然科学実験

まず N302 室においてカテゴリー（物理，化学，生物，地惑）共通のプログラムを行いました。具体的には，自然科学実験の概要，TA としての仕事内容と一般的な心構え，各実験共通の安全上の注意点などについて，スライドを用いた説明を行いました。次いで 14：15 より 16：00 まで，各カテゴリーに分かれ，カテゴリー別の実験の詳細やシステムに関する説明，ならびに安全教育を行いました。

（和多 和宏）

N　アカデミック・サポート

この分科会は，アカデミック・サポートセンターが実施する学習サポートのチューター（TA）を対象に行われたものです。業務内容においてコミュニケーション能力や会話能力が重視されるため，自己紹介や質疑応答などを重視した研修を実施しました。今年度からチューターに採用された３名と，昨年度から引き続いて担当するチューター（TA 研修会は昨年以前にすでに修了済み）４名の，全７名が参加しました。他にアカデミック・サポートセンターのスタッフが参加し，講演自体はスタッフ（特定専門職員・インストラクター）の清水が担当しました。

はじめにアイスブレーキングを兼ねて，参加者の自己紹介を行いました。次いで学習支援や授業を実施する先進的な TA の役割について，国内外の事例，北大でのこれまでの試みやデータを見た後，学習サポートチューターの意義，役割，位置づけを確認しました。チューターは，正課外で学生と個別型・単独型の対応を行いますので，いろいろと難しい場面もあります。その際の注意点や心得，正課の内容に沿った具体的指導方法などについて，先輩チューターの経験も交えてアイディアを共有しました。実際の学習サポートの際には担当科目の専門的知識や，チューター各自のさまざまな工夫も要求されますが，参加したチューターは，実際に勤務を行う上での心構えができたのではないかと思います。

（清水 将英）

授業の質保証をめざして
～第 22 回北海道大学教育ワークショップ～

６月７～８日，新ないえ温泉ホテル北乃湯で第 22 回北海道大学教育ワークショップを開催しました。新しく考案した授業のシラバスを作成しながら教育の基礎を学ぶ一泊二日の新任教員研修会です（表 1）。学内の 17 部局から 32 名が参加しました。

授業の設計では，目標を明らかにし，目標を達成するための方略を考え，目標の達成度を計る評価を作る必要があります。これらのエッセンスを短いレクチャーで伝えたあとは，グループのメンバーどうしの討論を通して互いを高め合う構成になっている

ため，参加者は部局の壁を越えた交流会を楽しんでいるうちに多くのことを吸収しました（写真 1）。

各グループで考案された授業内容は，5 グループ中 4 グループが「北海道」を題材にしたものでした。しかし，北海道を知ることを通して世界を知るという流れに工夫されていました。体験学習を導入した楽しい授業構成になっていたと思います（表 2）。

今回は，シラバス作成を中心としたいつもの内容に加え，北大をよく知ってもらうための多くのミニレクチャーを挟んでみました。これらは，ELMS, IR, アカデミック・サポートセンター，新渡戸カレッジに関するものですが，参加者からは，このミニレクチャーへの質問が意外と多く，時間が大きくおしてしまう展開になりました。また，定番となっている全学・総合教育，総合入試，著作権，知的財産のレクチャーも行いました（写真 2）。

今回，世話人として感じた反省点は，まず時間が不足したことです。増えつつある情報をコンパクトにスケジューリングすることが課題となりました。また，全体討論の時，各グループの成果物に対して同様の指摘が続いてしまいます。初めから，注意ポイントを明確に伝える必要があると感じました。

参加者の事後アンケートによると，満足と回答した人の割合が 100％でした。これは，北大の FD 始まって以来のことではないかと思います。あまり知る機会のない北大のリソースや情報を盛り込んだことが幸いしたのかもしれません。

（山田 邦雅）

表 1　第 22 回北海道大学教育ワークショッププログラム

2013 年 6 月 7 日（金）	
8：30	受付開始　百年記念会館大会議室
8：45	挨拶　新田副学長
9：05	バス出発　研修開始：オリエンテーション（挨拶，自己紹介）
10：20	新ないえ温泉「ホテル北乃湯」到着，玄関前で記念写真
10：30	レクチャー「北大の全学教育と総合入試」
11：00	休憩
11：10	レクチャー「教育における著作権と ELMS」
11：40	レクチャー「産学連携本部のミッションと活動」
12：10	昼食
13：00	レクチャー「FD の目的と教育倫理」
13：30	研修のオリエンテーション「ワークショップとは」・アイスブレーキング
14：00	休憩
14：10	ミニレクチャー「IR の取り組み～データからみえる北大生の特徴」
14：25	WS レクチャー「カリキュラムの構成要素とシラバス」「学習目標」「KJ 法」
15：00	グループ作業 I「授業の設計 1：講義題目・目標の設定」
16：00	発表・全体討論
16：30	休憩
16：40	ミニレクチャー「アカサポにおける学生支援について」
16：55	WS レクチャー「教育方略」
17：25	グループ作業 II「授業の設計 2：方略」
18：25	発表・全体討論
19：00	ミニレクチャー「新渡戸カレッジについて」
19：15	夕食
20：05	懇親会

2013 年 6 月 8 日（土）	
7：30	朝食
8：30	WS レクチャー「教育評価」
9：00	グループ作業 III「授業の設計 3：評価」
10：00	発表・全体討論
10：50	休憩
11：00	修了証書授与式
11：10	参加者の個人的感想や意見
12：00	昼食
13：00	バス出発
14：30	JR 札幌駅北口到着

写真 1　グループ討論

写真 2　鈴木総合教育部長によるレクチャー

表２　各グループが作成したシラバスから…講義題目と目標

〈グループ A〉一般教育演習
【講義題目】えぞ学，学ぶなら…今でしょ！！
【一般目標】「北海道」という地域に対する深い理解をすることで，従来多くの人が考える単一民族国家である日本としての在り方に対して，北海道を通じて多種多様な地域形成の経緯を知ることが必要である。多様かつ広範な視野を養うために，北海道のなりたち，歴史・文化・自然を学ぶ。またフィールドワークを含む体験学習を通して，その特徴を理解し各地域における課題を発見しその解決方法を見出す。これらを通してより北海道の豊かな地域性を生かすことに役に立てる。
【到達目標】
①アイヌ語であいさつができる
②経済格差についての問題を説明できる
③昆布が成長する理由を理解し，自然環境と関連付けて説明できる
④北海道の地名の難読漢字を読める
⑤資料調査・データ解析・手法を習得し実施できる
⑥課外学習・フィールドワークの成果を発表できる
⑦グループワークで協調性を養うことができる
⑧北海道に関する課題を発見し，解決策を提案できる

〈グループ B〉一般教育演習
【講義題目】バナナダイエットを科学する
【一般目標】ダイエットの効果や意義について正しく理解するために，バナナという身近な食品を用いたダイエットについて自然科学的,社会科学的なアプローチを用いて検証する。グループ単位で全員が授業計画に従って行動し，お互いにコミュニケーションをとりながら到達目標を達成する。
【到達目標】
①バナナという題材を用いて，流通の仕組みについて理解し論じることができる
②バナナダイエットを実践し，効果を統計的に検証する方法を身につける
③バナナダイエットのパフォーマンスについて分析し，発表することができる
④バナナの種類による成分の違いが説明できる
⑤ダイエットに伴う心理的影響が推論できる
⑥ダイエットと政策との関連を説明できる
⑦論理的なプレゼンテーション能力を身につける
⑧グループ内で役割分担を明確にし，協調することができる

〈グループ C〉フィールド体験型一般教育演習
【講義題目】北海道なう
【一般目標】地球規模で発生している様々な問題の解決が求められている。本集中講義では，その解決に貢献する人材を育成するため，Think globall, Act locally（世界規模で考え，地域で活動する）の実践を図る。また北海道におけるフィールドワークの計画，実践と総括を通し，課題発見能力，情報収集・分析能力を高め，情報伝達能力を身につける。
【到達目標】
①北海道の５つのテーマ（医療・農業・酪農・漁業・環境）について説明して問題を挙げることができる
②世界の５つのテーマ（医療・農業・酪農・漁業・環境）について説明して問題を挙げることができる
③フィールドワークに参加し必要な情報を収集できる
④情報整理手法（KJ 法，統計処理等）を習得し使用できる
⑤自分が発表するパワーポイントのスライドを作成できる
⑥グループワークにおいて毎回発言できる
⑦討論において他の発表を評価する発言ができる

〈グループ D〉総合科目
【講義題目】北海道の将来を考えよう　～人と自然のかかわりから～
【一般目標】自然豊かな北海道の発展には，正と負の両面がある。人口減少が予想される北海道の望ましい将来像を探るために，北海道の自然・社会・歴史の特質を理解し，具体的なデータを用いて，北海道におけるより良い生活様式について提案する。
【到達目標】
①日本の他地域と比較し，北海道の自然が有する特徴を具体的事例を挙げて説明できる
②必要な情報を適切な方法で入手できる
③北海道の自然環境と人間生活の特徴を統計的手法を用いて分析できる
④北海道の自然・社会・歴史の特質を理解した上で，北海道でのよりよい生活様式を提案できる

〈グループ E〉大学院共通授業
【講義題目】北海道から世界に発信する
【一般目標】近年，国内外において研究成果を公表し社会的に還元することが研究者には求められている。そこで，他の専門分野との関連を理解した上で，自身の専門分野の内容についての，コミュニケーション能力を高める。北海道を一つのキーワードとして各人の専門分野の内容を，実践的かつ実学的に発信する能力を身につける。
【到達目標】
①自分の専門分野の知識を基にして，北海道をテーマとした 10 分のプレゼンテーションを英語で行うことができる
②他の専門分野の発表を聞いて，適切な質問を英語で行うことができる
③自分のプレゼンテーションを基にして，写真や動画を用いて Web ページを英語で作成する
④北海道地域の専門家から問題提起いただいて，それに対して各専門分野からのアプローチを提案できる

気持になり，やってよかったと思いました。今述べたことは20年以上も前のことですが，こうした個々の小さな経験が積み重なって今の私が出来上がり，今の仕事につながったのかもしれません。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

Greetings from a New Visiting Professor

Hyeree Min (Center for Teaching and Learning, Seoul National University)

The request that I write a greeting as a new visiting professor has made me think about the long relationship that I have shared with the Institute for the Advancement of Higher Education (IAHE) of Hokkaido University (HU). My first visit to this Institute was in 2005, when I was researching the roles of Centers for Teaching and Learning in Japanese universities. Thanks to the joint symposiums held afterwards by Seoul National University (SNU) and HU, I visited the Institute three further times due to the participation of the Center for Teaching and Learning (CTL) in SNU that I belong to, and this position as a visiting professor marks my fifth visit to HU.

This is the first time I have had such continuous communication and long standing relationship with one single institution, and also the first time that I have felt so attached towards foreign professors as colleagues; as such, I personally consider this to be a very special and meaningful tie.

To briefly introduce myself, I am an associate research professor at the CTL in SNU. The CTL is an institution which aids and supports the teaching of professors and learning of students. There are several divisions within the Center: Division of Teaching, Division of Learning, Division of e-Learning, and Division of Academic Writing. Since 2002 I have been in charge of the Teaching Division.

My role in SNU can be categorized into three parts. First, I plan and implement educational programs on teaching methods. As a result much training is taking place for current, new and future faculty members (such as part time instructors and Ph.D students) respectively. Recently the emphasis has been on the educational use of mobile equipment and smart devices (iPads, etc). In addition, the introduction of teaching methods training as an e-learning course is also a major topic.

Currently in Korean universities, e-learning and development of online contents are of highest importance and consequently attract the greatest portion of the budgets. SNU in particular has invested a significant amount in making the University's contents open to the public. CTL also invests most of its budget in making films of university lectures; such contents are made public through YouTube and also SNUON, an application developed by SNU for ease of access to such contents through mobile devices as well.

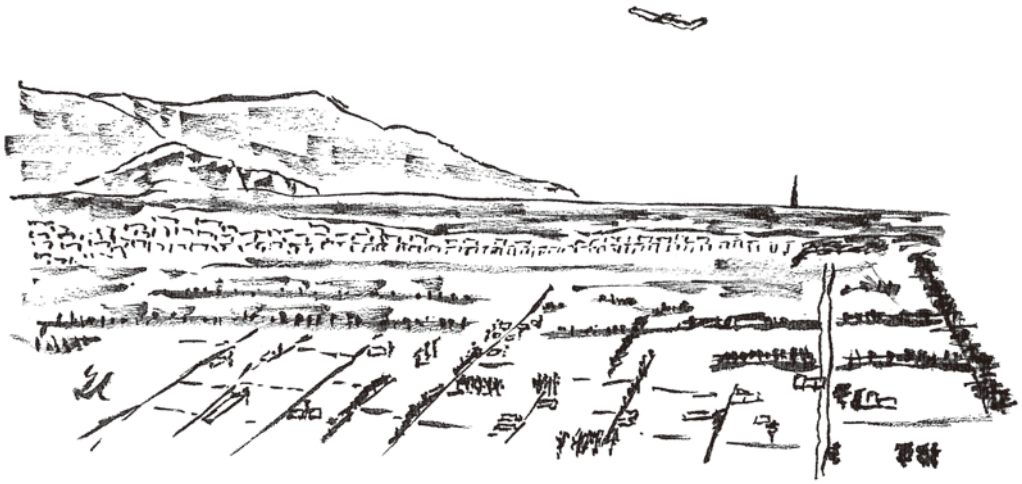
The second role I play is teaching consulting. Though this may be a relatively unfamiliar field in Japanese universities, teaching consulting is considered to be an effective method for professors in reflecting upon their teaching methods. The program involves recording professors' lectures and meeting them one-on-one to discuss their lecture (on the basis of the recording) to allow the professor a chance to self-assess their teaching methods. As such, this

is the most professional support program offered to individual professors, and approximately 70 professors and instructors participate in this program every year.

Finally, I am responsible for the research and study of the state of education in SNU. This involves gathering opinions of both professors and students regarding the education they give and receive, along with analyzing available data. As this results in valuable information upon which SNU education can be improved, I consider this to be one of the most important roles I play within the university. This is also the field in which I have received the most assistance from IAHE, and this reflects the great significance and importance of the cooperation between SNU and HU. An extension of my work in this field is my participation of the upcoming Institutional Research Symposium this 7th August, where I will present on the current state of Korean education at university level.

This introduction of my work at SNU and recalling the past relationship between the two institutions helps me appreciate the importance and significance between the two universities and renews my gratitude towards IAHE and its professors for inviting me here. I would like to take this opportunity to sincerely thank all the professors of IAHE for their warm welcome and support they have extended during the past week so that I may adjust to life in Japan and HU without any trouble.

There is a saying in the chapter of Studying in the Analects of Confucius (論語 學而篇): “What a pleasure it is to have friends visit from afar!” (有朋 自遠方來 不亦樂乎?) I hope that I also may be such a friend.



生涯学習 LIFELONG LEARNING

特別講義「大学と社会」終了

全学教育の特別講義「大学と社会」を開講し，終了しました（写真 1，2）。

本講義は，平成 10 年度より学部 1 年生を対象としたキャリア教育の一環として開講しています。社会の第一線で活躍する本学の卒業生が後輩にあたる主に 1 年生を対象に，学生時代から現在までの体験談を中心にお話をいただき，受講生である学生は，これらの講義を通じて，大学生活のあり方や将来のキャリアについて考える能力を育成することを目的としています。

今年度は，表 1 のとおり，11 人の卒業生に講師としてお話をいただきました。多くの方々が卒業生ならではの熱いメッセージを後輩たちに送っていただきました。

1 年生を中心に 62 人の学生が受講しました。今年度は昨年度よりも受講者数が少なくなりましたが，質疑応答では，時間が足りなくなるほど数多くの質問が出るなど充実した授業内容となりました。

なお，講義の模様はオープンコースウェア（http://ocw.hokudai.ac.jp/）で試聴することが可能です（学内限定）。また，科学技術コミュニケーション部門の協力により Facebook の「いいね！ Hokudai」（https://www.facebook.com/Like.Hokudai）で各講師を紹介中です。　（亀野 淳）

表 1　社会と大学スケジュール

4 月 11 日（木）	○ガイダンス（亀野）
4 月 18 日（木）	○本授業の意義など（亀野）
4 月 25 日（木）	林 美香子氏（慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科特任教授）　◇農学部卒
5 月 9 日（木）	川崎 ナナ氏（国立医薬品食品衛生研究所生物薬品部長）　◇薬学部卒
5 月 16 日（木）	樋口 真理花氏（三菱化学株式会社）　◇理学部卒
5 月 23 日（木）	堀 俊介氏（監査法人ハイビスカス統括代表社員　公認会計士・税理士）　◇経済学部卒
5 月 30 日（木）	藤本 雅久氏（森永乳業株式会社　別海工場長）　◇水産学部卒
6 月 13 日（木）	山崎 知之氏（三菱重工業　技術統括本部　先進技術研究センター先進デザイングループ　主任）　◇工学部
6 月 20 日（木）	窪田 博之氏（国際協力機構農村開発部）　◇農学部卒
6 月 24 日（月）	○中間まとめ
6 月 27 日（木）	藤野 真一郎氏（恵庭市教育委員会社会教育課施策担当（主査））　◇教育学部卒
7 月 4 日（木）	蝦名 未希子氏（株式会社 WEB サクセス）　◇文学部卒
7 月 11 日（木）	○最終まとめ
7 月 18 日（木）	清水 兼悦氏（札幌山の上病院リハビリテーション部長（北海道作業療法士会　会長））　◇現医学部保健学科卒
7 月 25 日（木）	国吉 聡志氏（沖縄タイムス社写真部）　◇法学部

写真 1　講義のようす

写真 2　質疑応答のようす

平成 25 年度全学インターンシップ始まる

平成 25 年度の全学インターンシップがスタートしました。現在，夏休みの実習に向けて，説明会，学生と企業の希望のマッチング，事前研修などを行っています。

4 月 15 日及び 17 日に「平成 25 年度全学インターンシップ説明会」を開催し，両日に全学の学部生，大学院生約 320 名の参加がありました。なお，15 日は，インターネット回線を活用し，函館キャンパスと双方向の説明会をしました（参加者 22 名）。

今年度の説明会においては，昨年度に全学インターンシップに参加した学生からそれぞれ体験談を発表していただき，今年度の参加希望者に対する参加意欲の向上を図りました。その後，全学インターンシップの担当者である，高等教育推進機構高等教育研究部生涯学習計画研究部門亀野准教授及びキャリアセンター高橋インターンシップマネージャーから制度や具体的な手続きの説明がありました。

また，5 ～ 7 月にかけて，参加希望学生と企業等のマッチングを行い，7 月 3 日現在 144 名の参加が決定しています。参加が決まった学生に対しては 7 月 2 日，5 日，9 日，12 日に講義形式の事前研修を実施し，その後，1 名 10 分あたりの個人面談も実施しています。これらの事前研修，個人面談はインターンシップ実習の効果がより高まるよう実施しているものであり，これらを経て，参加学生はそれぞれの企業・団体で夏期休暇にインターンシップ実習を行う予定です。　（亀野 淳）

2012 年度スポーツトレーニングセンター利用状況

2012 年度は年間合計で延べ 34,000 人に迫る利用者がありました（表 1）。2009 年は 16,198 人の利用に留まっていましたが，2010 年は 24,695 人と 1988 年以来 22 年ぶりに年間利用者が 2 万人を超えました。利用者はさらに増加しており，2011 年度は初めて延べ 30,000 人超え，そして 2012 年度はさらに最高記録を更新しました。

2011 年度より平日は朝 7 時からの早朝開場を実施しており，授業時間前に利用する学生も多いため継続して行っています。

また，2012 年 10 月にスポーツトレーニングセンターの Facebook ページを開設しました。

https://www.facebook.com/HokkaidoUniversitySportsTrainingCenter/

授業予定や占有利用，開館時間の案内，臨時休館の連絡などを中心に，利用者数や機器情報についても掲載しています。ホームページ（http://life1.high.hokudai.ac.jp/sports/）とあわせてご覧下さい。　（瀧澤 一騎）

表 1　2012 年度におけるスポーツトレーニングセンター利用者数

期間	内訳	2012 年度	2011 年度	2012 年度 /2011 年度比
小計	サークル・クラブ団体	24,753	23,858	＋895（104%）
	個人利用学生	8,444	5,848	＋2,596（144%）
	教職員	682	440	＋242（155%）
合計	－	33,879	30,146	＋3,733（112%）

公開講座「アドバンスドランニング講習（1 期）」が開催されました

5 月 9 日より 6 月 20 日まで，隔週木曜日に市民ランナー対象のランニング講習会が北大陸上競技場にて行われました。この公開講座は，フルマラソンで好タイムを目指す市民ランナーを対象に，北海道大学陸上競技場において陸上競技部の学生がペースメーカーをつとめて，一人ではなかなかできない高強度のトレーニングを行うものです。1 期目は 20 名強の参加があり，天候や気温が心配された日もありましたが無事当初スケジュールを消化することができました。参加者も充実したトレーニングになったようです。

今後 7 月～ 8 月に 2 期，9 月～ 10 月に 3 期が開催されます。（瀧澤 一騎）

小学生対象のかけっこ教室「未来のアスリート目指して」開催

5 月 12 日（日）に，北海道大学陸上競技場において北海道大学公開講座「未来のアスリート目指して」が開催されました（写真 1，2）。この教室は，3 年前より開催されており，小学校の運動会が集中する 5 月末～ 6 月上旬の前に，かけっこで速く走るコツを小学生低学年対象に講習を行っています。申し込み期間に新聞で取り上げられたこともあり，募集50名に対して100名を超す応募がありました。そこで，急遽補助の学生を大幅に増やし 67 名の参加者で行いました。

当日は天候にも恵まれ，ウォーミングアップとしての鬼ごっこに始まり，走り方の講習，スタートの練習などを行い，最後には全員でリレーを走りました。陸上競技部員の補助も適切に行われ,「速くなった！」との声も聞かれました。いくつかの報道機関も取材に訪れ，後日ニュースなどにおいて報道されました。注目度も高いことから，来年度以降も継続して行う予定です。（瀧澤 一騎）

写真 1　ウォーミングアップの鬼ごっこ

写真 2　グループ毎のスタート練習

科学技術コミュニケーション CoSTEP

気軽に専門家と対話する「サイエンス・カフェ札幌」，英語でチャレンジ

2013 年 5 月 26 日（日）14 時から第 69 回サイエンス･カフェ札幌「宇宙のカタチ，銀河のレシピ」を開催しました。ゲストは北海道大学大学院理学研究院教授の羽部朝男（はべあさお）さんと，同特任助教のエリザベス・タスカーさんです。羽部さんは宇宙の構造形成，タスカーさんは銀河や恒星の形成を研究しています。

エリザベス・タスカーさんは，2011 年 7 月に日本に来たばかり。日本語はあまり得意でないことから，タスカーさんのお話は英語で行うことにしました。これは，69 回のサイエンス・カフェ札幌の中で初めての試みでした。

聞き手に伝える工夫

サイエンス・カフェ札幌の聴衆組成はテーマによって異なりますが，来場者の中には，英語でのお話をうまく理解できない方もいると思われました。そこで，英語が苦手な方にも内容を理解できるよう，工夫を凝らしました。

まずは，カフェ全体の構成を，前半と後半の二つに大きく分けました。前半の話し手は羽部さんです。宇宙の構造を理解するために必要な，基本的な内容や宇宙の構造を解き明かしてきた歴史などについて，日本語でわかりやすく話していただきました。難しい用語などについてはファシリテーターとの対話を盛り込み，丁寧に解説しました。この部分を聞き手が理解することが，タスカーさんの英語の話を理解するための下地にもなります。

休憩をはさみ，後半はタスカーさんのパートです。タスカーさんは科学技術コミュニケーションやアウトリーチ活動に興味があるそうで，札幌の高校生に英語でのレクチャーを行ったこともあります。そういった経験を活かし，ジェスチャーを交えながら，ゆっくり，はっきりとした大変分かりやすい英語で話していただきました（写真 1）。

また，ファシリテーターが使う言葉にも気を配りました。ファシリテーターがタスカーさんとやりとりする場合に，日本語も使うようにしたのです。「今のお話は〜ということですか？」と日本語で質問してから，それを英語にしてタスカーさんに尋ねました。このことで，タスカーさんの話を「見失って」しまっても，ファシリテーターの日本語質問をきっかけとして話の流れを推測し，話にまた「追いつける」ような工夫を取り入れました。

英語の「字幕」を準備する

英語が苦手な方にも楽しんでもらうため，さらにもう一工夫取り入れました。メインの大きなスクリーンの他に，小さなスクリーンを 1 枚準備し，そこにタスカーさんのお話の内容を「字幕」のように映し出したのです。これは，タスカーさんに事前にトークリハーサルを行っていただき，その撮影映像をもとにして，あらかじめ作成したものです。タスカーさんのスライド一枚に含まれるお話のエッセンスを，日本語で箇条書きにしたスライドを作成し，タスカーさんのお話にタイミングを合わせて表示しました。

アンケートの結果から

カフェ当日は，150 人を超える参加者が会場に足を運んでくださいました。13 時半の開場と同時に

写真 1　英語で研究を紹介するタスカーさん

写真２　満員の会場のようす。市民と研究者とが，やりとりするシーンも見られました。

市民が訪れ，カフェ開始前には満席となってしまい，立ち見も出るほどでした（写真 2）。

カフェの参加者にはアンケートで感想を伺いました（回収率 61％）。参加者は会社員が 22％と最も多く，ついで大学生でした（図 1）。また，参加者の 89％が「参加してとても満足」，または「参加して満足」を選んでいたことから，今回のカフェが多くの方に楽しんでいただけたことがうかがえました。

英語のサイエンスカフェについて自由記述で意見を尋ねたところ（この項目に関しては 63 名が回答），「よかった」「おもしろかった」などというポジティブな意見が 86％あり，多くの方に楽しんでいただけたことが分かります。「英語は苦手」という記述も見られましたが，一方で「字幕があったのでわかりやすかった」という意見が 14％ありました。英語のサイエンスカフェにおいて，字幕は有効な試みだったといえるでしょう。

また他の自由記述欄では，「タスカーさんが分かりやすくお話してくださったので，不自由ありませんでした（30 代女性）」や「楽しく表情豊かなトークに魅かれました（50 代男性）」など，研究者の能力を高く評価する意見も多く見られました。さらに，「自然科学は国際的に展開される学問〜中略〜なので国内にいながら海外の学者の話を聞くことは重要なことだと思います（10 代男性）」や「英語の勉強になってよい（30 代男性）」など，カフェの可能性を広げる肯定的な意見も聞かれました。

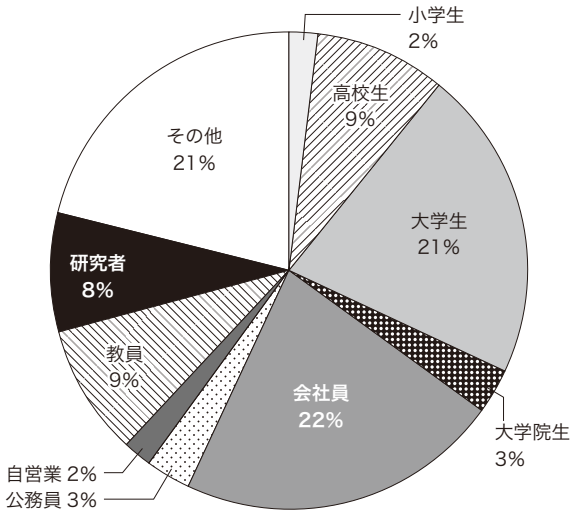


図１　参加者の内訳。高校生・大学生も多くみられました。

大学と社会の橋渡し

今回は，英語でのサイエンスカフェに挑戦しましたが，多くの方に満足いただくカフェを提供することができました。大学には海外出身の研究者も多く在籍します。カフェの言語を日本語に限らないことで，科学技術のひろがりや未来を感じるサイエンスカフェの開催につながるかもしれません。

あたらしい取り組みにも積極的にチャレンジし，大学と社会を橋渡しする場としての「サイエンス・カフェ札幌」を進化させてづけていけたらと，思っています。　（長濱 祐美）

教育支援 EDUCATIONAL SUPPORT

アカデミック・サポートセンターの新メンバー紹介

今年度４月からアカデミック・サポートセンター（ASC）のスタッフになりました浅賀圭祐と申します。昨年度まで理学院宇宙理学専攻の博士課程に在籍していました。専門は素粒子物理学です。学生時代は教育機会に恵まれ，主に２つのことに取り組みました。1つはGSI（Graduate Student Instructor）です。これは２人の大学院生が学部生の授業を担当し授業計画の立案から成績評価案の作成まで行うというもので，３年前から理学部物理学科の演習の授業で導入されました。GSIとして力学演習と電磁気学演習を担当する中で，教育に対する意欲が高められました。もう１つはASCでのチューターです。ASCでは学生の勉強面での質問に大学院生のチューターが対応する学習サポートを行っています。私は３年にわたり物理学･数学･統計学のチューターを担当させて頂きました。このような経験で学んだことは多く，とても鍛えられたと思っています。

学習サポートでは，学生の自主的な学習を支援するというのがテーマです。チューターをする際はこのことを意識し，学生が主体になるような対応を心がけます。話を聞きながら理解の整理を助け，最小のヒントで本人に正解に気づいてもらえたら最高です。このように相手から正解を引き出すことは難しいですが，上手くいくと相手の表情に成功の証がはっきりと現れ，大きな喜びを感じます。

これらを原体験とし，学生のサポートに取り組んでいきたいと考えています。宜しくお願い致します。

（浅賀 圭祐）

この４月にアカデミック・サポートセンター（ASC）に着任しました吉田清隆と申します。昨年までは成蹊大学理工学部で助教として研究・教育に従事していました。専門は統計学で学生時代は正規分布の拡張である楕円分布の仮定の下での検定手法に関する研究を行っていました。また最近は教育統計に関心を持っており，項目反応理論や認知診断モデルにもとづく能力試験の理論・応用に関するテーマを扱っています。

出身は本学大学院工学研究科システム情報工学専攻(当時)で北大は８年ぶりとなります。北大に戻って大きな変化を感じたのは，何と言っても総合入試の導入と移行制度の復活です。私自身，学科移行経験（教養部理Ⅰ系から工学部情報工学科へ移行）がありますが，当時はASCのような進路（移行）相談や学習サポートなどの学生支援を専門に行う部署は（少なくとも私の記憶には）無く，移行先の研究内容と本人の興味とのミスマッチに悩む友人も少なからず見てきました。長い年月を経て今度は学生さんを支援する立場となり不思議な感覚を覚えると同時にやりがいを感じています。

ASCにおける私の主な業務はアカデミック・アナリストとして総合入試や移行制度などの分析をし，それを現場にフィードバックすることです。まだまだ勉強不足の点もありますが，学生さんが充実した大学生活を送れるように微力ながらもお手伝いできればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

（吉田 清隆）

日誌 EVENTS, *March-May*

3月

1日(会議)　第3回総合教育移行専門委員会
(会議：持ち回り)
第4回総合教育教務専門委員会
(会議)　平成24年度第5回高等教育推進機構学務委員会
3日(シンポジウム)
大学間連携共同教育推進事業IRキックオフシンポジウム(同志社大学)
5日(会議)　入学者選抜委員会
6日(会議)　第68回教務委員会
7日(行事)　一般入試(前期日程）合格者発表，私費外国人留学生入試合格者発表
7日(会議)　クラス担任幹事会
7日(会議)　大学間連携共同教育推進事業　第1回卒業生調査研究委員会(関西学院大　丸の内キャンパス)
10日～15日(行事)
一般入試(前期日程）及び，私費外国人留学生入試合格者の入学手続期間
11日(会議)　大学間連携共同教育推進事業　教学評価体制開発評価委員会(関西学院大　丸の内キャンパス)
12日(試験)　一般入試(後期日程)
14日(会議)　クラス担任等連絡会
21日(会議)　総合教育移行専門委員会
(会議)　平成24年度第6回高等教育推進機構学務委員会
(会議)　入学者選抜委員会
(行事)　一般入試(後期日程）合格者発表
21日(談話)　第4回遠友学舎炉辺談話
24日～27日(行事)
一般入試(後期日程）の入学手続期間
25日(行事)　学位記授与式(札幌キャンパス)
25日(講習)　大学間連携共同教育推進事業　IRツール講習会
26日(行事)　学位記授与式(函館キャンパス)
26日(会議)　大学間連携共同教育推進事業　第2回英語力評価研究委員会
27日(会議)　平成24年度第8回学生委員会
28日(会議)　平成24年度第10回教育改革室会議
28日(談話)　第5回遠友学舎炉辺談話
30日(会議：持ち回り)
第5回総合教育教務専門委員会

4月

4日(行事)　全学TA研修会
5日(行事)　新入生オリエンテーション，総合教育部ガイダンス
8日(行事)　入学式
10日　全学教育部　第1学期授業開始日
25日(会議)　平成25年度第1回教育改革室会議
25日(会議)　IRシステム運用部会(TV)

5月

7日(会議)　第69回教務委員会
7日(会議)　平成25年度第1回学生委員会
14日(会議)　入学者選抜委員会
15日(行事)　新渡戸カレッジ開校式
15日(会議)　新渡戸カレッジ運営会議
23日(会議)　高等教育推進機構教員選考委員会
23日(会議)　高等教育推進機構運営委員会
30日～31日(会議)
平成25年度国立大学教養教育実施組織会議(熊本)
30日(会議)　平成25年度第2回教育改革室会議
30日(会議)　第3回大学IRコンソーシアム運営委員会(TV)

行事予定 SCHEDULE, *July-September*

◆7月
24（水）　水曜日の授業終了日
25（木）　木曜日の授業終了日
30（火）　火曜日の授業終了日
31（水）　月曜日の授業を行う日（水曜日の授業は行わない）

◆8月
1（木）　初習外国語統一試験日（通常授業は休講）
2（金）　金曜日の授業終了日
4（日）～5（月）
オープンキャンパス
5（月）　月曜日の授業終了日（第1学期授業終了日）
6（火）～9月26日（木）
夏季休業日
13（火）　成績報告締切（非常勤［帳票］）
19（月）正午
成績報告締切（常勤［Web入力］）
26（月）　平成18～25年度入学者の全学教育科目成績Web上公開
26（月）～27日（火）
全学教育科目成績確認及び成績評価に関する申立て期間
26（月）～9月26日（木）
自由設計科目登録変更期間

◆9月
上旬～中旬
学科等分属手続：当該学部（2年次以上）
25（水）午後
学部・学科等移行ガイダンス
26（木）　学部・学科等紹介
27（金）　第2学期授業開始日
27（金）～10月3日（木）
学部・学科等移行手続き（予備志望調査）
27（金）～10月3日（木）
抽選科目の申込期間（Web入力）

ニュースレター　2013，No.95　目次

〈巻頭言〉新渡戸カレッジと４学期制
新田 孝彦 …… 1

第４回「シラバスコンクール」推薦科目を公表 …… 3

「学生調査 2012 年報告書」から見える北海道大学の学生像（1）…… 4

全学教育科目における学生の自習時間
―平成 24 年度授業アンケートより― …… 5

「一年生・上級生調査 2011 年」の比較分析を公表しました …… 7

高等教育フォーラム「ルーブリックを使ってみよう」開催される …… 7

全学教育 TA 研修会を開催
―162 名が修了― …… 8

授業の質保証をめざして
～第 22 回北海道大学教育ワークショップ～ …… 11

Greetings from a New Visiting Professor
Hyeree Min …… 15

特別講義「大学と社会」終了 …… 17

平成 25 年度全学インターンシップ始まる …… 18

2012 年度スポーツトレーニングセンター利用状況 …… 18

公開講座「アドバンスドランニング講習（1 期）」が開催されました …… 19

小学生対象のかけっこ教室
「未来のアスリート目指して」開催 …… 19

気軽に専門家と対話する
「サイエンス・カフェ札幌」，英語でチャレンジ …… 20

アカデミック・サポートセンターの新メンバー紹介 …… 22

日誌・行事予定 …… 23

目次・編集後記 …… 24

編集後記

新年度になってからもしぶとく残り続けていた原生林の雪も融け，エンレイソウの花はまわりの草に覆い隠され，夏も近づいているはず…ですが気温の上がらない日が続きます。このニュースレターが発行される頃は猛暑になっていたりするのでしょうか？

７～８月は七大戦に向かっている部活動が多く，今年は７校の中でも比較的暑い場所の大阪での開催です。涼しい札幌に慣れた身体のまま大阪に行くと熱中症になりやすいよ，気を付けてね，と学生を送り出しています。暑さに負けず，北大生が大阪でベストパフォーマンスを発揮できることを祈っています。

先生方も授業のない８～９月は執筆や調査の勝負所かと思います。これは本州より涼しい札幌の方が地の利あるはず。こちらもベストパフォーマンスが発揮できるように祈っています。祈るだけではなくて，自分自身もがんばらないといけないですね。（いっき）

ニュースレター（旧「センターニュース」）
（北海道大学高等教育推進機構広報誌）
通算 **第 95 号**

発行日：　2013 年 7 月 25 日
発行元：　北海道大学高等教育推進機構
（旧高等教育機能開発総合センター）
〒 060-0817 札幌市北区北 17 条西 8 丁目
電話（011）706-7520，FAX（011）706-7854
編集委員：◎細川敏幸・山田邦雅・竹山幸作・木村純
亀野淳・三上直之・瀧澤一騎・鈴木誠
池田文人
ご意見，お問い合わせは◎印の編集委員まで
電話（011）706-7514，FAX（011）706-7521
インターネットホームページ：
http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/index.html